

刻む会たより

No. 33

2006.12.15

長生炭鉱の「水非常」を歴史に刻む会 (代表 山口武信)
事務局 宇部市常盤町1の1の9 宇部緑橋教会内 Ⅲ 0836 (21) 8008

年の瀬を迎え、会員の皆さん、市民の皆さん、あわただしい毎日をお過ごしのことと思います。

さて、私たちの会にも一筋の光が見え始めました。運動を立ち上



げ一五年目にして、事故当時、炭鉱で働いていた二人の生存者がいることが明らかになり、さつそく、山口代表、島先生、喪長老の三人で韓国へ訪問していただきました。このことは、韓国における真相究明委員会のご活躍があつてのことだと思えます。

三人が韓国を訪問しているとき、すれ違いで韓国から数十人の真相調査委員会の方々が長生の現地に、大型バスをチャーターして視察に来られました。

また、一一月の例会で確認した「たとえ私たちの、目標とする慰霊碑建設が困難であるにせよ、とりあえず、宇部市の責任で『床波の海岸で何が起こったのか』の銘板を設置せよう」という要求は、

佐々木県議の申し入れで(別ページ記載)に対し、宇部市の冷たい反応が返ってきました。

「来年までは何としても銘板だけは」という思いもあつて、緊急ですが、都合のつく役員で宇部市を訪問し、交渉した結果「金は出せないが、この文言だったら設置できるだろう」という流れになっています。

今回は三人の韓国訪問記、真相調査団からのお礼、私たちが寄贈する(銘記されないかもしれませんが)銘板の文案などを掲載します。

来春は、生存者二人を迎えての慰霊祭となります。皆さんのご協力をお願いいたします。

지옥에서 살아난 2인 64년만에 만났다



죽을때마다 수를 조사하던 광생존자 김경봉 설도술 등

은 내로와 두 생존자의 기억이 활자
자면서 사진의 실체가 더 구현되
다.

15일 오후 부산 동구 초량동 여리
당호텔 앞손의 한국 노년 2명이 지
를 기쁘고 안의 무어기름 연보구

이들은 1942년 한국인 100여 명
이들이 수몰되 드장된 광생 여의구
2004년 1월 유엔(유엔) 사 조사

김 용은 수몰사고 당시 편중 속이
일근 10월의 질수 위험 때문에 강도
접구를 맺은 것으로 기억했으나 실

地獄から生きてかえった2人 64年ぶりに会う

19日午後、釜山東区のアリランホテル。80代の韓国の老人2人が疲れた様子もなく、何かを熱心に説明していた。すでに8時間目だ。

喜寿の日本の老人2人は彼らの話を一言も聞き漏らさず書き取っていた。長生炭鉱の事故に関する歴史的な実態を示す画龍点睛の瞬間だった。

「水没事故の3、4日前から、日本人の労務監督者たちが水漏れしている所に常駐しました。でも、私たちには何も言いませんでした。(ソル・ドスル翁)

日本の老人の一人が首をかしげた。

「当時長生炭鉱で働いていた日本人たちは、事故が起きる3ヶ月以前にすでに海水が漏れているのを知り、「やがて大変なことになるだろう」と言っていたそうです。」

韓国の老人たちは、当時日本人たちが3ヶ月前に事故の可能性を知っていたという事実に、日本の老人たちは、これが分かっている、朝鮮人たちに一言も言わなかったという事実に驚いていた。

韓国の老人2人は、64年前異国の地で同日同時に惨事を体験したが、お互いを知らずに生涯をすごしてきた金ギョンボン(84歳 ソウル)とソル・ドスル(慶尚北道)だった。

彼らは、1943年韓国人130余名以上が水没して犠牲になった日本山口県宇部市の長生炭鉱の韓国人強制殉職者のうち、「日帝植占下強制動員真相糾明委員会（真相糾明委）」が確認した生存者だ。

日本の老人2人は、日本の市民団体「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の山口武信（75.元宇部女子高校長）会長と島敬史山口大名誉教授（73）だ。この会は、長生炭鉱水没事故の真実を明らかにし、犠牲者の追悼碑建設のために1991年に結成された市民団体だ。日本の学者たちと二人の生存者の面談は、お互いに人生に余恨を残さないようにとの真剣な雰囲気の中、休むことなく行われ、日本の学者たちが調査してきた内容と二人の生存者の記憶を照らし合わせながら、事件の実体がさらに具体化した。

金翁は水没事故当時、炭鉱側が近隣の村への浸水の危険のために坑口を覆ったと記憶しているが、ソル翁は単に犠牲者の家族が坑道に入らないように入り口を塞いだけだと証言した。

日本の学者たちは、海の下10余kmまで坑道が掘られていたが、坑口は陸にあり、村への浸水の可能性は希薄だったと説明した。炭鉱側が村への浸水の危険を口実にして、犠牲者らを救助しなかった可能性が高いということだ。

この日の出会いは、本紙の報道に相次いで接した「長生炭鉱遺族会」が、山口会長に生存者がいることを知らせて劇的に成し遂げられた。

山口会長は今年3月心臓の手術をして、行動が不便だ。しかし、二人の生存者が高齢であるため、なるべく早く証言を記録したいと言って積極的に動いた。

19日正午アリランホテルで出合った二人の80の老人はしばらく抱き合った。共に苦勞した同僚に会った喜びもしばらく、二人の老人は事故の真相を糾明しうる最初で最後の機会である自分たちの証言を日本の市民団体に聞かせるために、急ぎ旅装を解いた。

真相糾明委は、金翁とソル翁のほかには、国内に長生炭鉱水没事故の生存者はいないと見ている。

面談が終わった後、山口会長は「大事な多くの生命を失っても、日本の地方政府が知らぬ存ぜぬで、私たち市民でもと思い、子供たちに正しい歴史を教えることを大切にしてきた」「日本の生存者と目撃者から聞いていることより、真相をもう少し明確に知ることができた」と明るく笑った。

（釜山 ワンジュン記者）

釜山市における長生炭鉱坑夫生存者聴取報告 平成18年10月18日～21日 (山口武信氏の報告)

。私たち調査班の裴基秀、島敏史、山口武信の3名は、韓国長生炭礦連合会に連絡をとり、東亞日報の新聞記事にある、長生炭鉱関係者の3名中、記憶の確かなソウル市の金景鳳氏と浦項市の薛道述氏が当時の長生炭鉱の様子を知るための聴取りに去る10月18日から10月21日の間釜山市に向った。聴取りは、宿舎のアリソンホテルと海雲台のバジリ食堂の2ヶ所で行った。

Ⅱ. 薛道述氏(包 五合) 1918年生(大正7) 88才

住所 慶尚北道 浦項市長鬮面金吾里

一、渡日の経緯 昭和13年頃だったろうか？ 20～22才の間だった。土地の若者が4、5名郷里の派出所に呼び集められて釜山に連れて行かれた。釜山では各地から集められた者は7、80名になっていた。全員ハルビンを履かされて、船に乗せられ連れて行かれた所が長生炭鉱だった。

二、生活 飯場では毛布が2枚配布された。食事は700人位の人が交代で自由に食べられた。小魚が煮て出された。

三、別氏改名 昭和15(1940)年、当時三井関連の会社になっていたので、上司が三井という姓をつけて、三井道述と改名された。飯場は高い板障に囲まれていた。

四、賃金 出来高払いで、1画幾つとなっていた。故郷の父親の借金も払えたり土地も新しく買うことができた。水非常の時、3ヶ月の成績の成績で、1等は500円、2等は450円、3等は400円賃金が出るようになっていて、自分は3等の400円を貰える筈だったが災害のために金券は貰えなかった。後半の4年間は現金を払えなかったから逃げるので、金券を貰った。水没の前には自分の郷里に金券送ったという書類を見せられたことがあった。また、一生懸命働いたので、上役は可憐からて貰って、2ヶ月の休暇を貰って郷里に帰ることになった。

五、水非常当日 水没事故の前日入坑した。それ以前には昭和16年10月30日の出水のことは何も聞かされてはいなかった。ここ3、4日連続で水が多く出たり少なくなったりしていたので、2人いた守衛達？には尋ねたあたりし、何か気付いている風であった。朝4時頃坑内から上り、疲れたので「風呂に入って飯場を休んでいたら、作業服で早く坑口に来い」と、禪出係が言ってきた。間もなく事故があった。坑口では、女和孩子たちが口々に父を戻せ、兄を戻せと喚くので、憲兵がやって来て坑口を板で塞いだ。

六、水非常後 1ヶ月位仕事が無くてぶらぶらしていた。元の新浦炭鉱の排水をして、作業をしていた。その後①小野田の本山炭鉱に移った。ここで「奥さん」を呼んで、子供が産れた。それから家族を小野田に置いて②北九州のほうじょう炭鉱③名古屋のいばき炭鉱(西炭)

④小野田60番の釜山炭鉱⑤新妹神田炭鉱⑥再の小野田の本山炭鉱に渡り敗戦、

商船で帰国し、父を手伝い米作りをした。

② 金景鳳 (召君号) キム キョンボン 1922年生(大正11) 84才

住所 ソウル特別市 江西区 傍花3洞 傍花6團地 APT

一、渡日の経緯 昭和14(1939)年春、村の指示板に募集の知らせが出て、12月2名

18才の者が強制的に刑事に連れて行かれた。下町で7、80名いた者はヘルメットを着せられて個人個人が行き先を指示されて、船に乗せられた。自分は長生炭鉱に連れて行かれた。

三、生活 自分は狭い坑道の中で作業させられて坑内で病気になる、体が動かなくなると、もう死んだものと思ひ、藪に落ちた外には運の出される途中で朝鮮人の1人が動いているのを見付けて、未だ死んでいないぞと言ったので、病院に連れて行かれ助かった。一回は長生炭鉱逃げ出したことがあった。しかし途中で扱って連れ戻されて、木の棒で叩かれ、今も頭は大きな傷跡が残っている。

部屋は1部屋に30人入れ、其中が通路になって、通路に足を向けて両側に寝た。寒い時には2人で2人分の毛布を一緒に掛けて寝た。

現金は見つかることがなかった。

三、水非常当日、5番方を終り、1番方と交代して坑口まで来たが、藁藁と坑口を板で塞いだ、9時頃だった。

四、水非常後 水没後は何も食水なかった。①水没後、1週間逃げ出して八幡製鉄所へ行った。②次に横濱へ行き、③兵庫県の芦屋の住居で可愛いかうれて10月頃、④昭和19年7、8月頃単に召集されて、訓練された。敗戦3日前訓練後足留めされて敗戦 帰国。後、朝鮮戦争従軍

尚、10月20日、海軍台の遺族会総会に参加させて頂いた。

金会長 揚副会長 政府委員の許光茂

氏には大変お世話になりました。

総会出席者は、遺族会員17名。

政府委員1名 記者1名 長生炭鉱会3名

生存者2名 計24名

以上



2006年10月 日

宇部市長

藤田 忠夫 様

長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会

代表 山口 武信

要請書

銘板の設置について

市民の幸せを願って、日夜ご努力されている貴職に、心から敬意を表します。

また、私たちの会に対して、常日ごろのご協力にあつく感謝申し上げます。

私たちの運動の最大の目的は、現地周辺に犠牲になった人々の慰霊碑建立ですが、残念ながら土地問題がネックとなり、今日に至るも実現しておりません。

ひきつづいて、今後とも、貴職をはじめ、各方面のご支援をいただきながら、ねばり強くとりくんでまいります。

さてそこで、当面のとりくみとして、現地に当時の水没事故の状況を表示した銘板の設置を、という声が遺族側からもあがっています。

先日は、山大大学院生が長生炭鉱をモチーフにした作品で、建築学会設計競技で日本一になったという、うれしいニュースもとびこんできました。

いよいよ長生炭鉱の名を全国に知らしめることでしょうか、現地にはピーアが無言で訴えるのみで、当時の状況のくわしい説明はありません。

ついでには、ピーアの見える現地に、水没事故状況を明示した銘板の設置についてご検討くださるよう、心からお願いいたします。

以上

長生炭鉱の銘板設置について

前略

お疲れさまです。さて表記の件について事務局会議（11月17日）で確認しましたとおり（11月20日）市役所に要請しました。

11月20日久保田部長、他担当課長等と話をして（一時、険悪な空気になりましたが）の結論は、

- ①. 市の予算で設置するとすれば、財政難の折、予算外の金は1万円も出せない。
出せるか、出せないかは別にしても、その結論が出るのは、来年度4月以降。
- ②. ^①長生会が銘板を作成して、それを市に寄付することについては検討する。
その場合も設置者は、「宇部市」と言うことになる。

簡単に言えば、以上①と②が結論です。

そこで来年2月に間に合わせようとするれば②しか考えられません。予算的には、数10万円かと考えられます。例会の事務局会議を待っていては、間に合いませんので緊急にご相談したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

銘板の文案です

11月26日

佐々木明美

海に沈んだ炭坑

目の前の海から突き出ている二本のピーア（排気筒）は、昔ここに長生炭鉱という海底炭鉱があった名残です。

一九四二年（昭和一七年）二月三日未明、この坑道の沖合一キロメートルのところでも水没事故が起こりました。この事故で一八三名の炭鉱労働者が犠牲となり、そのうち一三七人が朝鮮人労働者でした。

犠牲者は一人として遺体を引き上げられることはなく、未だに冷たい海に眠っています。

皆様、どうぞこのことを心にとどめてご覧下さい。

床波の西光寺には、当時作成された犠牲者の位牌が保存されています

二〇〇七年一月

真相糾明委員会からのお礼の手紙です。

拝啓

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会 事務局 行政課 郭喆俊です。
先生方に感謝の辞を差し上げようこの手紙を書いた次第です。

先日、10月20日から10月26日の間、委員会及び市、道公務員など24名が貴国の各地方を探訪する研修を実施しました。

今回の研修を実施した間、諸先生方のご協力をいただき、研修団員を代表し、遅くなりましたが、感謝の意を表し、諸先生方の熱情と誠意に感銘を受け、韓国にも先生方のような方が活動をなされ、過去の不幸な歴史に対する現世代および、未来の世代に明るい歴史を伝えることができる人が多く生まれることで、両国間の共感帯を形成することが出来る契機が出来ればと期待します。

今回の研修団員から研修所感文が届きましたが、皆が諸先生方の熱情的な案内に感謝し、心から慰勞されたとありました。

本当にありがとうございました。

宇都市「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の戸井牧師様をはじめとするお二方の先生、福岡の福留先生および横川輝雄先生、長崎の山下あきお先生、高きね康稔先生に感謝申し上げます。

最後に被害者の痛みを心から分かち合い、すべての国家間、個人間、両国間において平和な関係が持続することを祈ります。

もし韓国の各地域に連絡をされる事項や、訪問の機会がある時は添付の連絡先（Eメール）を参考に、ご連絡下さい。何かお役に立てることがあれば幸いです。

諸先生方のご健康と幸福を心からお祈り申し上げます。

敬具

2006年11月22日

日帝強占領下強制動員真相糾明委員会 事務局 行政課 郭喆俊